



## キユツクリヒ女史とフレイベル

中原由利

ゲルトルト・E・キユツクリヒ (Gertrud・E・Kieckhef) 女史

は、一八九七年十二月二十五日ドイツのシュツットガルトで、教師の娘として誕生した。四人兄弟の末っ子として家族の愛情を一身に集めて成長したが、九歳の時生母を亡くした。その後ベルリンのハイスクールを卒業し、続いて同じベルリン市内にあるベスタロッチー・フレイベルハウスという教員養成校に学んだ。この学校は、フレイベルの姪で、若い日にフレイベルと共に、フレイベルの幼稚園で働いていたヘンリッテ・シュラーデルという人によって、一八七四年に設立されたのである。現在も五〇〇名の学

生があり、幼児教育はまず母親の教育からというフレイベルの主旨を目標とした幼児教育者の養成、及び貧しい子供への教育をしたベスタロッチーの遺志に従う、社会福祉事業家と、家政婦を養成している学校であり、百年を越える歴史と伝統に支えられつつ、時代の要請に応える働きが今なお続けられているのである。

### フレイベルとの出会い

キユツクリヒはこの学校に二カ年学んだが、この時彼女はフレイベルと出会った。そして彼女を生涯幼児教育の道に歩ませるこ

とになったのである。しかも彼女がその生涯をかけて幼子を愛し、母親を尊み、保育者をつくしんだ心は、キリスト者としての深い信仰によるところが大きいが、彼女自身幼児教育者としての誇りと自信は、若い日にこの学校において、フレーベルの直接の弟子であったヘンリッテ・シュラーデルから、直接幼児教育を学んだことによる、フレーベル直系の孫弟子としてのゆるがし難い事実によるのである。

キュックリヒが世を去る（一九七六年一月二日召天）しばらく前に、広島大学名誉教授の荏司雅子氏との対談の冒頭に、次のように述べている。「私の勉強した学校の名誉校長であるヘンリッテ・シュラーデルが、フレーベルの幼稚園（ドイツに作られた世界最初の幼稚園）でフレーベルに教えられて保育者になり、あとでベルリンに学校を開いて私共を教えて下さったのです。すばらしいおばあちゃんでしたが、講義のとき、私、ほんとによそ行きの思いをして、「父フレーベルはいいました。あなた方はその子、その責任者である」といわれ、私はほんとうに孫だと思っていませう」（『保育専科』対談「愛の心で子らとともに」より、一九七六年四月号）

## 日本の幼児教育のために献身

キュックリヒは、一九二二年（大正十一年）十月十五日、二十四歳の若さで故国ドイツを後にし、単身日本にやって来たのである。この日を迎えるために若い彼女はどんなに悩んだことか。しかしあるとき、日本への召命を強く感じ、当時、第一次世界大戦で荒廃した祖国ドイツの子供たちの教育に、その一身を捧げる決意をもって児童保養施設で働いていたが、その中で彼女は神に祈って日本の子供たちのために働く決心を、その心のうちに深く固めていったのである。

来日早々、キュックリヒは、東京において向島教会、及び目白にあった福音教会本部に保母養成所を作った。ペスタロッチ・フレーベルハウスを卒業した後、彼女は更に女子高等師範学校に学んだので、幼児教育者の養成は彼女にとって使命であった。この保母養成所は、一九三二年東京保育女学院となり、二年課程の本格的な幼児教育者の養成機関となった。しかし後に東洋英和女学校幼稚園師範科に吸収合併され、彼女も同校で教えることとなった。

又、キュックリヒは幼児教育者養成のかたわら、向島鐘ヶ淵に子供の家託児所を開設し、当時東京下町の働く母親のために、子供たちを預り、保育者としての実践にも励み、第二次世界大戦中も日本にとどまり、この事業のために尽した。しかし一九四五年

(昭和二十年)八月十五日、日本の敗戦が決定した日に、彼女の愛した学校も、教会も、子供の家もすべて灰尽に帰っていた。終戦後教会員の紹介により、彼女の次の働きの場は埼玉県礼羽村(現在加須市)に与えられ、現在では社会福祉法人愛の泉という、乳児院、保育所、養護施設の三つの児童福祉施設と、養護老人ホームを含む総合社会福祉事業にまで成長発展したこの事業に、当時敗戦による、肉親と家をなくした浮浪児の收容から始めて、彼女はその生涯をかけて、天に召されるその日まで、情熱をもってこの事業に努力し続けたのである。

## 母親への教育

キョックリヒは、その若い日にペスタロッチー・フレーベルハウスに学んだが、彼女はフレーベルが主唱した、同校の幼児教育者養成の教育目標である、「幼児教育はまず母親の教育」を、五十余年にわたる彼女の幼児教育への献身の中で貫き通した。

フレーベルの名著の一つである『母の歌と愛撫の歌』に流れている、フレーベルの教育思想に対する彼女の理解と解説は秀逸である。彼女は九歳の時生母を亡くしたことにより、彼女の生涯の大きな憧れは、自分が「お母さん」になることであつたと後年述懐しているが、フレーベルの教育思想と相俟って、フレーベルの

教育思想の中で、特に彼女に与えた影響は、女性がほんとうの母の目をもち、母の心をもち、母の姿となるということである。

彼女はよく講演を頼まれたが、よくわかる日本語を駆使して、内容の深い講演をした。その講演の中で、母の会の際にはよく「あゝかあちゃん」と、居並ぶ母親に呼びかけたが、その呼びかけには力があつた。彼女の生涯の憧れであつた「かあちゃん」たちを目の前にして話す、彼女自身も当時埼玉県加須市につくつた社会福祉法人「愛の泉」において、收容されている多くの子供たちの「かあちゃん」でもあつた。

フレーベルは『母の歌と愛撫の歌』の中で、我が子を抱いている時、我が子をつめる時、我が子と遊ぶ時、母親は幸せと喜びを感じるが、同時に我が子に対する責任、それは我が子の信仰と、希望と、愛を育てることにあることを述べているが、彼女も母親の理想について語っている。彼女は、世のすべての母親や保育者が、ほんとうの母としての心をもつことを理想として語り続けた。幼い人を教育する、すべての人に母の心を語り続けた。

「近頃のお母さんはホテルのお姉さんみたい、衣食住だけ面倒みて、子供そのものには手をつけない方がいいと無責任な考えをしている」と彼女はなげいていたが、それでもなおかつ彼女は、子供の豊かな成長のために、世の女性のすべてが、ほんとうの母に

なることを語り続けた。

「女性の特徴は情緒です。花火のように、火のように、又星のように、太陽のように、情緒的なものが豊かなのが女性です。そして女性の体から生命は生れ、生命を運ぶ、生命の持ち主、それが最も大事な女性の特徴です。フレーベルは、この女性の感情、生命を保護する母親愛によって、健全な家庭の愛が生まれるといっているのです」（『乳幼児の教育』第15号巻頭言より）と、キュックリヒは語り続けたのである。

## 幼子への愛

牧師の子であったキュックリヒは、敬虔なクリスチャンとして、その生涯を貫き通した。だから彼女の思想の根底を支えたのはキリスト教であった。人間は神によって創られたものであり、その人間を取り巻くすべてのものも、神の作品であって、その作品の中に生きる、働くもの、すべてを納めるものは神であるという信仰に立脚した彼女の思想は、二千年の歴史をもつキリスト教が、ヨーロッパに根づき、生を受けたものの生きる姿勢を絶えず問いかけつつ、人々の心を支え、多くの文化を生み出す原動力となった豊かな土壌の中で、育くまれたものであった。だからフレーベルの第一の名著『人間教育』の冒頭のことばである「凡そ天

地間の万物の中には、ひとつの永久不滅の法則が存在し、これが万物を生かし、且つこれを支配している。」は、フレーベルと同じ国に生れ、同じ土壌の中で育った彼女にとっては、至極当然のことばとしてこれを受けとっている。そしてフレーベルのいう、人間は生まれながらに神性をもっている、という思想も、彼女は特にフレーベル独特の思想とは思わず、ヨーロッパをヨーロッパたらしめたキリスト教による人間観である、と語っている。神が創られた作品である人間が、神の意志に従って、この世において与えられた才能を十分發揮できるようにするために、教科書式に子供に与えるのでなく、一人一人の子供に対して、違う目、違う手、違うことばが何より必要であるといった。

彼女は、神の創られたすべてのものの中で最も大事なものは人間である。その人間の、今生れたばかりの、汚れていない、与えるもの全部を素直に受け入れる赤ちゃんや幼子たち、だから乳児期、幼児期は人間づくりの最も大切なときである。これはフレーベルの教えの筋であるといっている。

しかしフレーベル直系の孫弟子としての誇りをもつキュックリヒは、その財産としての教育思想をただ受継ぐだけではなかった。幼児教育の原点としてのフレーベルの思想を十分理解と尊重はしているが、その真理に立脚して現代の幼子には何が必要か、

どのようにそれを生かすべきかを問いつけ、現代に生きる孫弟子として、むしろフレーベルの今日的な意味を探り続けることに、使命と責任を痛感していたといえよう。

フレーベルの代名詞ともいべき恩物について、キュックリヒはまず時代を考えなくてはいけないという。フレーベルの時代は人間が少なかった。子供が何をするにも空間と時間が十分にあり、一人の子供が支配できる領域がどこにでもあった。しかし現代は子供の数が多く、十分に支配できる場所を与えられない。だからフレーベルが考案した通りにすることはむずかしい。しかしその通りにしなくても子供は恩物で遊びながらいろいろなることを発見していく。この発見していくことがとても大切で、発見したことを喜んで認めていく。今フレーベルに聞いてみたいと思う。現代に生きる子供に恩物を与えた時には、子供はすばらしい発見をするが、それを認めたいといえば、フレーベルはこの孫弟子の意見に賛成するはずである。要は遊び方の方法ではなく、恩物で遊ぶことにより、子供の創造力を刺激し、遊びたくなる意欲を盛んにすること、そして自分の考える目的に向かって作り上げていくことが大切であると彼女は強調した。その時、恩物は十分現代の子供たちの知能の発達に答えるだけの要素を、そのうちにもっていることを彼女はつけ加えることを忘れなかった。

## 保育者の養成

キュックリヒを生涯日本にとどまらず決心をさせたのは、関東大震災の焼野ヶ原に建った掘立小屋の軒先のあきカンに咲いた一輪の朝顔であった。罹災したにもかかわらず、花を咲かせるやさしい心に打たれ、この心をもつ日本人のためにと、大震災の翌年、早速保育者の養成をはじめた。彼女は、「私たち幼児教育にたずさわる者は、たとえ子供を生まなくても、母の心、母の愛をもたなくてはなりません。保育者は母でなければなりません」と語り、女性の生活、女性の使命は、ひとを保護し、ひとを養い、ひとを助けることであり、とり分け幼子とともにあること、幼子を愛し、育てることこそ、女性にとって最もふさわしい仕事であり、最も大切な仕事であることを強く訴え続けた。そしてフレーベルの有名なことばである「さあ！ 私たちの子供らに生きようではないか (Kommt, laßt uns unsern Kindern leben)」を、彼女は自ら五十有余年の働きの中で証ししていったのである。戦前は自らが創立した東京保育女学院、東洋英和女学校幼稚園師範科に、戦後は草苑学園、和泉短大において保育者の養成に力をそそいだ。フレーベルの孫弟子としての彼女の、情熱と祈りをこめて語ることばに、生徒たちは魅了され、その生涯の働きとして保育者

の道を選んだことに誇りと自信をもった。

キュックリヒのもう一つの大きな働きは、一九三一年（昭和六年）に日本におけるキリスト教保育にたざざる保育者の集団として、基督教保育連盟（現社団法人キリスト教保育連盟）設立に参画し、これを指導し、育て上げることに直接たざわったことである。当時 J K U (Japan Kindergarten Union) という幼児教育関係宣教師の集りがあり、この中に日本人のキリスト教保育者も加わって共に学んでいたが、年毎に日本人の数も増え実力もともなってきたことにより、独立の準備が進められ、日本人の手によるキリスト教幼稚園の大同団結が実現したのである。そして多くの宣教師たちは、この基督教保育連盟を育てるために協力したが、特にキュックリヒは最初から役員として、その運営と内容充実のために力をそそいだ。戦後は特に副理事長の要職にあり、求められるままに北海道から九州にいたる各地の保育者の研修会に、各地の幼稚園、保育所の母の会に出席し、保育の真理としてのフレイベルの教育思想に基づいて講演した。特にフレイベルの『母の歌と愛撫の歌』の例をあげては、永遠に変らぬ女性の特性を、使命を、語り続けた。

焼野原に一輪の朝顔を咲かせるやさしい日本人の心に打たれて、以来日本人を愛し、日本人のために、とりわけ女性と幼子の

ために働いたが、しかし彼女は、決してドイツ婦人としての誇りを生涯失うことがなかった。

彼女がよく語ったドイツ婦人の誇りであり、特徴である三つの K がある。

キュッへ(台所・Küche)、キント(子供・Kind)、キルへ(教会・Kirche)の三つである。台所は家庭を意味しているが、とりもなおさず、フレイベルの語る女性の特徴、その使命もこの三つの K を象徴的に語っている。

フレイベルと同じ国に生れ、同じ土壌に育ったキュックリヒは、若い日にフレイベル直伝の教育を受け、フレイベルとの出会いの中で自らの生涯の働きを決定し、ひたすらにその道を歩き通したが、彼女の生活そのものは、師の後に従うというよりも、フレイベルを自らのうちに消化し、自らがフレイベルと同化し、フレイベルとともに、変化の激しい現代の中にあって、むしろゆるぎない確固たる信念をもって、幼児教育の真理の火を輝き尽したといえよう。そして全国にある幼児教育者にその真理の火は、バトントッチされ、フレイベル生誕二百年記念を迎えた今日、キリストにある深い信仰と、フレイベルによる幼児教育の真理を語り続けたキュックリヒの働きは、フレイベルの名とともに、日本の幼児教育史に長く残るのであろう。(キュックリヒ記念財団)